

大会中止「生きる理由が…」

学校に行けない
コロナ休校の爪痕



下

「生きる理由がわからない」

大阪市の母親(43)は昨年の初夏、中3だった娘(15)の部屋で、そう書かれたメモを見つけた。娘が好きな絵を描くノートの後ろの方に、日々の出来事とつらい気持ちをきき出すように書きつつあった。「何もうまくいかない」

娘は3月に始まった一斉休校後、不登校になっていた。きっかけは、学校の吹奏楽部の大会が新型コロナウイルスの感染拡大で、なくなったことだった。

全国大会を目指す強豪。土日関係なく、朝5時に起きて朝練に参加し、放課後の練習は午後7時までかかることもあった。全ては、大会で良い成績を取るという目標のためだった。

中止が決まったのは休校中の昨年5月。娘は目標を

見失い、スマートフォンに没頭し始めた。学校に行かない生活が続き、昼夜も逆転した。母親はシングルマザーで会社員。忙しく、十分にかまえなかった。

6月の休校明け、娘が体調不良を理由に学校を休み始めた。朝は元気がなくても、ゲームをしているときはピンピンしている。「このままだったらニートになるよ」。母親がつい、強い口調でとがめると、娘は泣いて自室にこもった。後悔に駆られた。なるべく言葉をのみ込むようにした。

娘は今春、通信制高校に進学した。

それでも、気がかりは消えない。夏休み明けから、通学先の連携施設を休みがちに。深い友達はまだできず、夢中になれるものもまだない。「いつまでこの状況が続くのか。やりたいことが見つかるように見守りたい」と母親は話す。

愛知県の中1の女子生徒(13)は今年5月の大型連休明け、「もう頑張れない。学校しんどい」と涙を流して母親(46)に訴えた。その後、不登校になった。

小学校の頃から、つらい

ことが積み重なってきた。小5の時、学級崩壊に近い状態になったこと。小6だった昨年、一斉休校明けの授業がハイペースで進み、夏休みが短縮されたこと。

母親は「娘にとって、学校はつらい場所であり続けた。頑張れと言いつつ、かもしれない」と振り返る。

今年の夏休み、女子生徒は寝付きが悪くなった。スマホやゲームをやり続けて、明け方に寝る日も増えた。不眠や腹痛など、不調は日に日に悪化した。

学校のスクールカウンセラーは月に1度の予約制。母親が地元の児童精神科に問い合わせると、「初診の予約は12月以降になる」と言われた。「子どもが不安な気持ちを相談できる場所はあまりに少ない」

2学期から、女子生徒は母親に付き添われて、放課後登校を続ける。キラキラして楽しそうな中学生とすれ違つて、母親はせつない気持ちになる。「娘も、ほんの数カ月前までこの中にいたのに」

SOS見逃さないで



保護者ら周囲の大人はどう向き合えばいいのか。国立成育医療研究センターが2～3月、小中高校生501人に行った調査では、コロナ禍で「先生や大人への話しかけやすさ、相談しやすさ」が「減った」とする回答が51%に上った。マスクで表情が見えず、大人に余裕がないことが背景とみられる。調査を担当する半谷まゆみ医師は「ちょっとしたSOSを見逃さないようにしてほしい」。危機の察知には、積極的な観察が重要という。「子どもの気持ちをよく聞き、共感することが求められる」

一斉休校から1年半あまり。子どもは大人と違い、この時期にしかできないことが多い、それが失われ続けていると指摘する。「親や教師など身近な大人が、普段以上にコミュニケーションを密にすることが重要だ」と話す。(高浜行人)